

「言葉にできない知」を伝えること

—「わざ」の世界から学ぶ—

川口陽徳

教えてくれない？

最近、私に通っている合気道の道場に、新しい入門者がやってきました。真新しい道着に身を包み、さあやるぞと気合充分な様子なのですが、張り切れば張り切るほど、初めは戸惑うことになります。

それは、誰も教えてくれないからです。普通、中学校でも高校でも、学ぶことは教えてもらうこととセットになっています。教科書の内容を覚えること

や、先生が教えてくれることを理解しようとするところが、学ぶことであるわけです。

ところが、合気道ではそうではありません。具体的な指導はなく、「まねしてください」とだけ言い渡され、呼吸法、体操、「わざ」の稽古とどんどん進んでいってしまうのです。そんな中で、もう、何がなんだか、まねをしようにも何を見ればいいのかさえわからず、ギクシャクと身体を動かしている入門者の姿を見ると、思わず教えたくなくなってしまい

ます。ですが、そこは我慢。私もやはり教えません。

これは、意地悪なのでも何かを試しているのでもありません。逆説的ですが、「教えないこと」は一つの教育の方法なのです。もちろん、それには理由があります。「わざ」と呼ばれる伝えるべき「知」が、「言葉にできない」という性質をもっているのです。

今から始めるこの小さな文章では、合気道の稽古での私の経験を手がかりにして、「わざ」の世界の、「言葉にできない知」を伝えるための工夫について見ていきたいと思います。

身体が知っている

合気道の世界は身体で覚える世界です。師匠はいつも、「頭で考えるな」と私に言うのですが、それは簡単なことではありません。考えるのをやめられないのが難しいところで、「まずは相手の右手首をつかみ、ほぼ同時に右足から踏み出し、それから相

手の正面に入ってサツと反転。そのときの目線には注意しなくっちゃ」など、師匠の動きから自分なりに抽出したチェックポイントを、頭で確認しながら動いてしまうのです。でも、そんなことを考えていると反応が遅れてしまいます。そして、焦って固まってしまったりするのです。そのため、師匠には怒られてばかりいました。

そんな中でも、何度か、「その感じだ」と褒めてもらえるときがありました。妙な話なのですが、褒めてもらえるのは、自分としては調子がよくないときばかり。しばらく道場から遠ざかっていた後の久しぶりの稽古や、寝不足でフラフラしているようなときに限って、「いいぞ」と言われるのです。

確かに、そのときの私はあまり考えていません。調子が悪いので、「何とかなるだろう」と相手の仕かけを待っているだけなのですが、不思議なことに、そのときの方が身体は自然に動くのです。それ

は、とっさの反応のような感じで、「なるほどなあ、身体が知っているとはいくことか」と、自分のことながら感心してしまいます。どうやら私は、「わざ」を体得しつつあるようなのです。

そもそも、私が合気道を習い始めた動機には、言葉にできない「知」である「わざ」への関心がありました。「わざ」とは何か。「わざ」をどうやって学ぶのか。それを自分で経験してみたい。そんなことを思っただけの扉をたたいたのです。

この問いは、近代の学校教育が避けてきた課題です。ペーパーテストで理解を確かめる入試制度からも明らかのように、学校では、「言葉で説明できるかどうか」が重視されてきました。しかし、それは理解の一つの位相にすぎません。私が合気道で経験してきたように、「メカニズムを説明できなくてもできる」という理解の位相もあるからです。自転車の乗り方や泳ぎ方、歩き方なども、この後者の理解

といえます。説明はできなくとも、私たちは実際に泳ぎ、歩くことができます。このような「説明できないけれどできる」、「身体で覚えている」という状態も、もちろん「知っている」という状態の範囲に入りますが、近代の教育は、こういった理解についていねいに考えることを怠ってきたといえます。

見習う、盗む、まねる

—そして、形より出でよ

合気道の「わざ」は言葉にできません。言葉にできない「わざ」は体得するしかありません。師匠を見習え。盗め。「わざ」の世界は、弟子が師匠の模倣を繰り返すことによって「知」を受け継いできました。このような世界の稽古では、師匠の動きを「まねごと」まねることがなされます。私の道場の場合、入門した直後は受身の稽古だけが続き、それが終わるとすぐに、熟練した先輩たちを相手にした

いきなりの「わざ」の稽古が始まりました。

これは、西洋的な技術の伝達とは異なるやり方です。たとえば、ピアノのレッスンでは、右手、左手、両手と学ぶべきことを要素に分解し、順を追って学習を進めていきます。合気道では、足や手の動きだけを集中的に繰り返すようなことはせず、「わざまるごと」の模倣に最初から取り組むのです。

しかし、たとえ、弟子が師匠の「動き」を完全にコピーできるようになっても、それは「わざ」の習得ではありません。ややこしいところなのですが、師匠の「動き」の模倣が目指しているのは、実はその「動き」自体のたんなる再現ではなく、「動き」の意味や必然性を理解したうえで再現なのです。

ここでも合気道を例に取り、具体的に考えてみましょう。合気道の「わざ」の大枠は次のような感じになります。たとえば、師匠が私に「わざ」を掛ける場合、まずは私から、突いたり手刀で切り下ろし

たり、師匠に攻撃を加えることから始めます。そうすると師匠は、私の力を利用しながら攻撃をさばいて崩し、最終的には、抑えや固めなどの方法で決めます。稽古はこの様子を見ることから始まりです。そして、師匠が何度か繰り返す姿を見た後、弟子たちはペアになり、役割を交替しながら、自ら「わざ」をやってみるようになります。

では、師匠の「動き」のコピーが目的になると、何が起きるでしょうか。どれだけ正確に動いても（つまり、師匠の「動き」を完璧に再現しても）、攻



撃してくる相手の突く位置や早さが変わってしまったえば、その攻撃をさばくことはできません。突きをまともに食らうか、離れすぎて「わざ」に入れないか、そのどちらかで終わってしまうことでしょう。

これは、「動き」の再現にとらわれ、「わざ」を行使する根源的な理由、「相手の攻撃をさばく」という意味を見失っているから起こるのです。

さらに、より厳密に考えるなら、同じ「わざ」を見ているというのはい込みで、実際には二つと同じ動きはありません。師匠の動き自体が、常に相手の攻撃によって変化せざるを得ないからです。そう考えると、師匠の「動き」の完璧なコピーとは、あるときの、一回きりの「動き」のコピーであつて、そんなものは「わざ」の習得とは程遠い、役に立たない「動き」であるということになります。

そのように、師匠の模倣は再現が目的なのではなく、学びの方法であるといえます。最終的な狙い

は、「動き」の向こう側にある意味や必然性の体得。

必然的に生まれた意味ある動きこそが、相手の変化に自在に応じられる「わざ」なのです。このような「単なる動き」の模倣から離れ、「意味のある動き」へと向かうことを、芸道の世界は「形より入って形より出る」や「形から型へ」などと語っています。

「一緒に暮らすこと」の意義

私が通う道場は違いますが、本来、「わざ」の世界は、師匠の家に住み込み、生活を共にする中で学ぶのが常でした。いわゆる、徒弟制度、内弟子制度です。それは、共に暮らすことや環境が与える影響が重視されていたからなのですが、では、その中で、弟子は何を学んでいたのでしょうか。

稽古は後回しにされることが多かったようですが、それでも内弟子になることには意味がありました。師匠の家にいる限り、ほかの弟子が稽古を受け

る声や音曲の調べなども耳に入ってくるからです。内弟子にとつては、日常生活そのものが稽古の時間であり、「門前の小僧、習わぬ経を読む」のごとく、さまざまなことを身体で覚えていったのでした。

また、一緒に暮らすことで「師匠の考え方」がわかるようなもなつてきます。たとえば、宮大工の小川三夫は、生活を共にする中で、師匠が何を感じ、何に反応し、どう考えているかを知らうとしたと語っています^註。宮大工も典型的な「わざ」の世界ですが、「師匠の考え方」を知ることが、教えようとするしない師匠の言動の、真の意味を理解するために必要なことでした。小川は、最初はわからなかった「納屋を掃除しろ」という言葉が、実は「そこにある^{かたな}鉋屑や道具を見て学べ」という意味であったことに気づいたと述べています。もし、「師匠の考え方」がわからない場合は、真意に気づかず、納屋の掃除だけを、いつまでも続けていたかもしれません。

一緒に暮らすことの意義はまだあります。師匠の生活そのものが「わざ」の世界の「知」であり、学びの対象だったので。宮大工の生活では、仕事の後に道具を研いで翌日に備えるのが日課でした。合気道の世界では、朝晩に呼吸の鍛錬をせよと言われてきます。このように、「日常生活」と一言で言ってしまうと見えにくいのですが、職人には職人の、武道家には武道家の日常生活があったのでした。

入門したばかりの弟子にとつては、新しい日常生活は勝手の違う非日常的なものに感じられたはずで、内弟子として師匠と暮らす中で、その世界なりの日常生活の仕方を身に付けることも、「わざ」の継承において重要なことであつたのです。

言葉が経験の邪魔をする

— 教えない教育の理由

最後に、「わざ」の世界の言葉の話です。繰り返

してきたように、「わざ」は言葉にできません。しかし、部分的な記述であれば可能なはずで、実際、「転換のときには目線が大事」や「四方投げ裏のわざは深く入れ」など、稽古の合間に師匠がアドバイスをくれることがあります。それを「わざの要諦」としてまとめることはできませんが、師匠がそんなものを配布することはありません。

どうやら問題は書き留めることにあるようです。書き言葉の使用を意図的に避けているのです。いろいろな資料をひも解いていくと複雑な問題が見えてきたのですが、ここでは一つだけ、「言葉が経験の邪魔をする」という事態について触れたいと思います。

再び宮大工の小川ですが、小川は寺を見学にくる学生が見ているようで実は見ていないと言います。彼らは「平安時代の建物の軒は美しい」というような知識を事前にもっているせいで、それが本当に美しいかどうか感じようとしなないのです。これ

はつまり、事前に与えられた知識が経験を阻害しているという事態です。その代わりに行われているのは確認作業。学生は、書物か何かで得た情報を、実際の建物を前にして確かめているだけなのです。

経験を積むことが「知」の伝達の核である「わざ」の世界にとつては、言葉が経験の邪魔をするという事態は致命的なものでした。そこで「知」を書き留めることが禁じられ、弟子が経験できる環境が守られてきたのでした。この文章の冒頭で触れた「教えない教育」の意味も、こういった言葉と経験の問題を考慮した、一つの教育の方法であったのです。

「わざ」の世界の教育から 見えてくること

断片的ではありましたが、合気道での経験を切り口に、「わざ」の世界の教育を見ました。ここで触れた話は、私が考えてきたことを含む、「わ

「わざ」研究の成果の一端です。「わざ」の世界の教育は、秘伝的で前近代的な話として、あまり議論がなされてこなかったのですが、近年、研究が進んでいます。

この研究の目的は、昔に戻れというようなことではありません。研究者それぞれに思いがあるでしょうが、さしあたり、私が目指すのは二つです。

まずは、その只中にいるために反省的にとらえにくい今の教育を、少し距離をもって眺める目、異化する目を手に入れようということです。うまく伝えられたかわかりませんが、この文章を読んだ今、これまで受けてきた教育を振り返ってみるとどう感じられるでしょうか。

もう一つは、近代的な学校教育という枠組みにしばられず、教育という営みのもつ豊かな可能性を見直したいということです。近代の教育からはみ出し、秘伝的とされてきたはずの「わざ」世界の教

育。でも、どうでしょうか。ここまでの話を、特殊な世界の話だと感じたでしょうか。

私はそうは思いません。普段の生活でも、言葉にできないことがたくさんあります。それを伝えるための日ごろの工夫を思い出しても、教えていないことを学びながら育つ子どもたちのさまを思い浮かべても、「わざ」の世界の教育は「当たり前」であると思うのです。ただし、その「当たり前」に改めて気づくことは、なかなか難しいことではあるのですが。

(東京大学 大学院教育学研究科 博士課程)

教育哲学・教育人間学

注 本稿で触れた宮大工の話は、西岡常一・小川三夫・塩野米松／著、『木のいのち木のこころ 天・地・人』（新潮文庫、二〇〇五年）、小川三夫／著『不揃いの木を組む』（草思社、二〇〇一年）を参照しています。